

## 天風録

「本を差し入れてほしい」と、ロサンゼルスで自殺したとされる三

浦和義元社長は求めていた。長く拘置されて、外と遮断された生活。本という「窓」との接触がなければ、とても精神が持たなかったに違いない▲元社長は差し入れを許されたが、旧ソ連の強制収容所は厳しかったという。亡くなった作家米原万里さんは、かつて収容されていた女性からこう聞いた。「重労働やひもじさにも、寒さやノミにも耐えたが、本が禁じられたのはつらかった」▲発明されたのは「思わぬ方法である。夜の暗闇の中で、それぞれが記憶の中の本を読

取

40

30

50

20

30

30

30

んるカハはツはVリソソ。

H 20, 10, 27. (A)

又

LEI

み上げ、ほかの人が補っていくという「エア読書」。短編から「戦争と平和」「白鯨」など長編まで読み続けることで、過酷な日々を持ちこたえたという▲人の心が崩れそうになるのは鉄格子の中だけではない。いじめや虐待に遭ったり、生き方に迷った時もそうだろう。引きこもり経験のある作家石田衣良さんは、本を頼りに「自分は誰か」を考えた。「本に命を助けられた経験のない人はいないんじゃないか」と本紙インタビューに答えている▲本は楽しみを与えてくれる。自分の世界を広げてくれる。それだけでなく心の危機を乗り越える手だてにもなる。まさに「活字の底力」といえようか。きょうから読書週間。